こゝろの光

三徳の巻

前篇

本地と垂迹……一
總該萬有一心……四
法身般若解脱……七
三身の解……一三

後篇

一體三身……二五
無量光佛……二九
客觀觀念的證明……三三
心理的證明……三六
彌陀の觀念……三七

教の祖釋尊の本地と垂迹

佛教の小乘教やまた哲人としての佛陀は方便教であるから、釋尊としても過去久遠の昔は凡夫であつた。

佛教にも方便教と眞實教とある。眞實教とは宗教の眞實義を顯はしたる教へにて、如來の根本義を顯はしてある。方便教とは暫らく人間の機に應じて說いた說である。眞實教に本地と垂迹と云ふは、此地球上人類の有無に關せず、大宇宙本然として一切萬法の上に立てる如來在す。淸淨本然また圓滿に萬德成じて法として有せざるなく德として具せざるなきは本佛なり。如是本佛如來は常住に在ませり。而して迹佛として人間に迹を垂れて人類の身を以て此世に出玉ひしは、是人類を化度せんが爲なり。本佛如來の光明永しへに照らし常然として在せども、此地上に生れたる人類は無明の闇に迷ふて自己の木源を知らず生死の夢を貪ぼりて永く闇黑を出る能はず。此無明

闇夜の中に惑へる衆生は、直接に本佛如來を知る由なし。爰に於て如來佛智の不思議方便力を以て人類に應同したる身を以て、人類にミオヤの實在を示し、ミオヤの光明に浴して、人々本具のミオヤより受けたる佛性を育まれて、ミオヤの子たる本性を現はし、父子對面爲し得らるゝやうに、其教を垂れんが爲に、釋尊はミオヤより身を分けて此世に出玉へり。

一大事因緣經に本有法身常住無量壽佛といふは異人ならんや今日世尊釋迦牟尼我身是なりと。

尙ほ委しくは、法華經の壽量品に、釋尊の本體は無量壽佛にして本有常住にして永恒に變易あることなし其の本佛より身を分て、此の五濁の衆生の爲めに、久遠劫の往昔より以來、或は燃燈佛と曰ひ、また種々無量の名字と、また年齡にも或は長、或は短、時々に必らずしも名字も年紀も相同じからねども、其は方便にして人類を度すべき爲に假に現はれたる身に於てこそ別々になれ、其本地の本佛に立ち入て見れば同一の如來に在ます、是卽ち本有法身無量壽佛なりと。往昔は國王と爲り、世自在王佛に遇ひて開法發心して法藏比丘と爲り、無明の闇に迷ひ生死の苦を受くる衆生を如何にせば普ぬく救濟することを得べき、此れ至難の事なり、されども若し我れ是らの衆生の爲めに大安の國を立て、永劫に救ふにあらざれば迚も無明の迷子自から度脫することはできぬ。一切衆生をして容易く度脫の道を立てん。佛如來の無爲常住の涅槃界卽ち本佛常住の都に還へらしむるにあらざれば、永く生死の苦を出ること能はぬ。

實を云はゞ、大ミオヤの常盤の花咲匂ふ國なれども、一度迷出て親を離れて知らぬ衆生には、子に相應せる善巧方便を以て誘ひ出すにあらざれば中々出づることはできぬ。

是に法藏比丘として、此衆生を誘ひ出さんとの道を立つるやうに、諸佛の智慧を集めたる法藏比丘として、五劫に思惟を凝らし無量永劫に於て佛の大願大行を以て淨土を莊嚴し、此の淨土に衆生を入らしむ。衆生彌陀の本願業力に由つて初めて淨土に

生れたりと思ひしも、正に彼處に大悟無上の目を醒めて見れば、實には久遠劫の昔に於て離れたる本覺のミオヤの下に還へりしのである。故に實には本有常住の大ミオヤ在まして、衆生の爲めに本の御許に歸る道を知らしめんが爲に、方便垂迹の佛として世に出でましたるなり。是は法華經量品及び一大事因緣經の意に依る。

彌陀の大願力に依つて初めて彌陀の淨土に生れゆくと、何知らざるも彼土に到つて無生忍を悟りて見れば、實には久遠劫に離れたるミオヤの御許に還りたると云ふにつきては、聖善導の、一たび彌陀安養界に到れば、元來是我法王家と、此意なり。

大ミオヤが本にして迷ひたる子を衆生と云ひ、衆生をミオヤの下に誘引せんが爲に人間界に身を現はしたるを迹佛と云ふ。是宗敎としては實に信ずべき說である。

總該萬有一心

一大精神。佛敎にては宇宙實體は一大精神であると說く。天地萬物を統一綜合したる精神なれば、總該萬有心と云ひ、または法身如來藏性とも稱します。

世界萬物。十界の身心は悉く此一大精神の發現である。是に全知全能の德用ありて、天則秩序を整ふるは卽ち知の作用にて、萬物を生活々動せるのは能の作用と申します。

宇宙精神の實體の方は如來の自體にて、永恒不變にて、現象の方面は生滅轉變極りないのである。一大精神より發現れたる個々の精神を二に分て凡と聖と爲て、凡は無明態にて之を六凡とし、聖は覺醒たる心靈にて四聖である。此十界は一大精神より現はれたとすれば、人の精神の根底は玄深であります。

一心十界を造る。一大精神の分れたる個々の心は理に十界を具し事に十界を造ると十界とは地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六道と、聲聞緣覺菩薩佛陀の四聖とを併せたのである。人の心は十界何れにも成り得べき性能を有て而て因緣の事情によりて善惡の十界を造り出すことは、喩へば巧なる繪師が天人をも鬼をも自由に描き現すような

もので、一つ心が善惡に分るゝ因緣に就ては形と業識との兩面がある。先づ形の方から說明せば、無垢の本性が何して善惡に變化すと云はば、其本性が父母の素質の薰染を稟け、また姙娠中の母の心の持方のいかさに於ても、其子の素性に關係を及ぼす。夫より出生後には少年の時の家庭學校社會の敎育其他の周圍の事情は其人を善惡に醇化する資緣である。さて夫よりは最其人々に責任の重きは一生の業作と善惡の習慣性とである。其習慣性が鞏固にして決定したるを業識と申す。善惡六道と四聖と分るゝは習慣性と業力の結果であります。カントが天國は理論には無いとも有るとも證明は出來ないが、其の實行の結果はなくてはならぬと同じく、地獄や天堂は之を理論に證することは能はざるも、人の生涯の善惡の業によりて固りたる性格と其業力の自然は六道四聖なければならぬと、否現に各個々の情操と其行爲は六道を瞭然と證明されてゐるではないか。さて此十界は凡と聖と善と惡と其相に於ては淸濁相異りと雖も其本一心の造る處と申します。

法身般若解脫

無量光

是如來の體にて絕對の大靈體に在ます。又如來は心靈界の太陽である。例へば地上の生物が太陽の力によらざれば生存できぬ如く、斯靈光に依らざれば佛と成ることが出來ぬ。正覺の光明普ぬく十方界を照して衆生を攝めて佛化し玉ふ。故に無量光と名づけ又一切を永恒常樂を得せしむる故に無量壽と云ふ。衆生は本法身より受けたる佛性具する故に、斯光明に攝化せらるれば必ず成佛することを得、三世諸佛は斯光に依りて正覺を成じて無量壽の涅槃を得玉へり。無量光は如來の總德にて十一の光は別德を表はす。

無邊光（大智慧の相）

太陽の光線に比す。

如來大智慧の光明は遍ぬく十方界を照して衆生の爲に知見を與へ、一切智を得せ

しむ。此に四種あり四智と云。

一、大圓鏡智、此智光に我等が無明が照破されて、十方三世一切の身心萬法悉く知見せらる。一切の依正萬物は自己の智慧の鏡に映現せざるはなし。

二、平等性智、斯智にて我等が吾我分別の迷を照破せられて各自の自性淨にして諸佛と異ることなきを自覺す。

三、妙觀察智、如來の智慧我に入り我如來に入りて如來の身と口と意とが冥合して我等凡夫の意識が如來の妙智として一切種智を悟らしめ玉ふ。

四、成所作智、凡夫の五官は麁末な世界の色聲等を感覺してをる。斯智は麗はしき佛身及び國土萬物や見ゆる色聽ゆる聲として悉く美ならざるなきを感ぜしめ玉ふ。

無碍光（解脱の德）

衆生の靈性を開發し煩惱を解脱し無上道に向上ましめ、解脱自由の靈的人格と爲さしむる靈力。

如來は神聖正義恩寵の三德を以て衆生に儼臨し玉ふ。

如來は至善最高の處に在まして道德の標準として衆生を向上せしむる標準と爲り玉ふ。

神聖と正義としては嚴肅なる父と見え、恩寵としては慈愛なる母と想はる。神聖は道德の源にて衆生の行爲を照鑑し玉ふ智慧である。正義は衆生の非惡を捨て正善に進ましむる勢力である。

恩寵、如來が衆生の親とし、一切を愛し聖き心を育て玉ふ働きである。如來の斯三德は衆生の父母として聖き人を造る德用である。

無邊光（相大、般若の德）

相とは如來の大智慧の光明は、遍ねく十方を照して衆生に知見を與ふること、例へば日光が地上の萬物を照す如くである。智慧の光に四種あり、故に四智と云ふ。大圓鏡と平等性と妙觀察と成所作とにて、

一、大圓鏡智、とは如來の大智は宇宙大なる智慧の鏡を以て有ゆる主觀客觀との一切を照して遺す無し、故に吾人の身も心もすべて如來の智慧の鏡の裡に分明に照つけてまします。

二、平等性智、衆生は吾我分別して我と彼と執着して居る。如來の平等性智は衆生の根底なる自性淸淨を照す時は平等淸淨なるを覺り玉ふ智慧、吾人が此光明に照されれば、自己返照して自性淸淨なることを覺らる、是大自覺大自我と悟らする智光。

三、妙觀察智、此光は喩へば日光が影萬水に映じて而して水中に赫々たる如く、如來の智光は一切衆生の心想に入り、衆生の心は如來心の中に入り、我如來に入り如來我に入り、而して我等凡夫の心を佛心に同化し玉ふ妙智である。

四、成所作智、斯智の光は相好微妙の中より衆寶莊嚴の淨土、眼耳鼻舌身に對する色聲香味觸の美妙の靈感、眼に對する淨界の妙色身また微妙の音聲等の佛身佛土の微妙美麗なる最美なる佛の身また微妙なる佛土の莊嚴を現はすのは斯智の作用である。

無碍光（解脱の德）

斯光は一切衆生の心靈を開發しまた煩惱を解脱して如來の聖意に叶ふ靈き人格卽ち佛の德を養なひ、解脱自由の身と爲して下さる作用である。

如來は宇宙最高の處に在まして、神聖正義恩寵の三德を以て衆生に儼臨し玉ふ。

如來の神聖と正義とは嚴肅なる父と觀え、恩寵は慈愛に富める母と想はる。

神聖とは如來が道德秩序の原則にて一切衆生の行爲を照鑑し玉ふ智慧である。

正義、如來は衆生の非惡を廢てゝ正善に進ましむる勢力にて、邪惡は斯光の缺げたる處に發る。正義は聖意に叶ふ行なれば益〻向上して佛心佛行を行爲ことを得。

恩寵、は如來は衆生の親とし一切を愛育し佛心を育て、衆生は御育に預りて聖意に叶ふ知見も開け、正義の行爲も出來ることに成る。

神聖

如來は宇宙最高座に在まして吾人の宗教心に對して一方よりは威神光明最尊第一一切諸佛の中心統一者、恰も太陽の諸惑星に對して中心たる統一者歸趣者たるが如くに觀じらる。一面よりは大慈愛の母として一切衆生を愛撫し掬養せらるゝ慈母の如くに想はる。

從來の宗教は二派に分れ、一方は如來は道德律の大主權立法者たると共に司法者として心靈界の太陽として、神聖と正義との光を以て一切に儼臨して常に行道と不行道邪正是非を照鑑し玉ふ大君位たり。

此方に重きを置くを道德的宗教と爲す、卽ち聖道宗とは是なり、故に此流儀の宗教觀は、

宗教道德律の最根底中心は宇宙最上位より絕對的に一切に普及せしむる大勢能で在ますこれを具體的に表示されたるが、

梵網經が釋尊最正覺を成じて正眞の知見を開きて、宇宙大道德の淵源を發見なされた、實に宇宙大道德卽ち無上菩提の中心は實に高遠甚玄にてまします。

今經に就て暫く其相を見んか、釋尊が正覺を得たる眼を以て大宇宙を大觀すれば、宇宙全體を盡して蓮華藏世界、無盡の莊嚴無盡の萬德具備して缺くことない。

三身の解

宗教にては世界及び人生の根底とまた終局目的を教ふ。眞理の人生を遂げんには偉大なる力を有てる靈格に歸依し、また人は偉大なる力を有てる靈格に歸依して、永遠の生命と常住の平和に入る道を教ふ。その偉大なる力を有てる靈格を眞の神、アミダ如來と名づく、如來には三身あり、一體にして三の位なり。佛教研究のためにも、修

養のためにも此の三身を知らなくてはならぬ。今此の三身の讃頌を略して解說する、意を注めて讀れんことを望む。

法身。法身とは天地萬物の實體。

法とは天則卽ち自然の理法。身とは實體。世に謂ふ自然理法によりて萬物は產出し擔保せらる。之を統一し擔保するものを實體とす。

諸君はいかゞおもふ。晴れ渡りたる淸宵に天を瞻仰すれば、實に無數の星宿は燦然として光を放ちて居るでせう。あの星宿が各一定したる軌道がありて其軌道に隨つて循環し各其秩序の整然たること。天文學者が豫測せる通りに毫もたがはずしてめぐり、此地球のめぐることにしても、また地上に生活せる植物にしても、動物の生活せる機能、人の五官の機能四肢の作用、精神や身體の機能にしても、皆一定したる秩序があり、また理法の一定したるあり、之を天地萬物を造化するの法身如來藏性と申す

法身の體とはいかなるものぞといふに、宇宙全體に充ちわたれる永恒の精神態、人間が精神があればこそ身體は知覺運動の作用あると同じく、宇宙精神あればこそ、宇宙萬有が生存す。

法身とは宇宙精神なり。

全智、宇宙精神に全智全能の二性が屬してゐる。いかゞして全智の具れることがわかる、猶にのべし如く、地球のめぐるにもあらゆる星のめぐるにも秩序の整齊せることまた動植物の秩序にも萬物に秩序の整齊せるのは全智の作用にて、萬物が生々活動するのは全能。

○

宗教に世界及び人類の根底と中心と終局目的とを定め、之を神とし、神は偉大なる力を有し、之に歸依して永遠の生命と常恒の平和とに入る眞理を教ふ。

偉大なる力を有する靈格をば眞の神卽ちアミダ如來と名づく。

如來は元一體なれども三の位あり、之を三身とす、卽ち法身報身應身是なり。

法身。天地萬物の實體、萬物を産し擔保する處の實體。法とは天則即ち自然の理法、是天則秩序を統一する實體である。法身の實在はいかゞして分るやとならば、視よ、清宵に天を瞻仰すれば無數の星宿燦然として光を放ち、彼の星宿が各一定したる軌道ありて之に隨て循環し其秩序の正しき、天文學者が測定せる如くに毫も違はず、また地上の生存せる動植物が生活機能に於ても秩序の整然たる、人の身體及び精神の作用も一として天則秩序に整へられざるなし。之が統一し秩序の存する根底は悉く法身の理法にあらざるなし。其法身とは無始無終本然の自性にて永恒の精神態である。

全智全能、法身の體に全智、嚮にのべたる萬物に自然に秩序を整ふるは自然に知の作用が具はりて、全能によりて萬物は生活々動する。法身とは萬物を遊化し一切の生命を擔保する實體である。

如來は萬物を産出するのみならず終局目的に攝取する爲に現象界たる一方に法身の大用より報身を開展す。現象世界は法身の力によりて顯現したる或一方面にて、また一方常恒不變の方面ありて報身在ます。

至眞至善至美の靈界に在して衆生を救靈したまふ。眞理の靈界とは美天國とも極樂淨刹界また寂光淨土とも名づく。彼處の萬物は金銀マニ寶石を以て嚴飾し、光明長へに輝きつゝ平和と自由とに充されたる處に、いと妙色麗しき相好を具へ、威嚴ことに巍くましませり。萬德豐富にして光明遍く十方世界を照し給ふ。

如來は無上の智慧の光明遍ねく照し亘りてませば、若しは瞑想觀念若しは聖名を稱へて祈る時は、いつか信心の靈窓開發す。神聖とは眞理の光をもて照鑑したまふことを信知する時は、自律的に道德の制裁を規定す。正義に對する信念は己を献げて如來の目的のために犧牲的に私心を犧牲て如來の正義に奉事する時は、克己耐忍勇氣勤勉甘んじて力行することを得。

恩寵の聖名とはナムアミダ佛を稱へて至心に信樂して我を攝受したまへと祈る時は

恩寵によりて信心開發し、自己の惡素質は解脱して心靈に復活し、聖光の中に攝受せられ、平和と歡喜との幸福なる生活を遂げ、報命盡きる時は正しく淨樂世界に無上の正覺を成ずるなり。

法身と智慧と解脱の三德を以て一切の衆生を攝取し玉ふが故に、是によりて衆生は救靈せらるゝ故に崇敬し讃美し奉る。

應身。人格の身を以て世界に出で教を示し玉ひし體にて即ち教祖釋迦佛陀なり。報身が高等の靈界に儼嚴し光明遍く照し玉へども、人類は無明に覆はれて自ら知見すること能はず、爲に衆生に應じて八相成佛の身をもて化を垂れ玉ふ。

釋迦牟尼初に天に在て、天上及び下界を利益し、地上に出ては中印土カピラの淨飯王を父とし、マヤ夫人を母とし幼にして聰明叡智、既に長ずるに及びヤソタラを娶りラゴラを得たりし榮燿權勢世に雙なきも、四門の遊びに世の非常を悟り、位と財とを棄て山に入りて勤苦すること六年、つひにガヤのヒハラ樹の下に石上に坐して四十九日天魔を降伏し、臘月七日の後夜明星東天に輝き出づる時朗かに罪惡の源を脱しネハンの大道を悟り玉へり。爾りしより人類を度するにネハンの道を以てす。ネハンとは永恒常樂の靈界即ち報身如來の範圍なり。其教に隨て信心開發し心靈更生する時は、肉體を有ちながら心は聖域に栖み遊び身終る時は實在に常樂世界に至る。

釋尊八十にしてクシナなる鶴林の中に於てわかれを告るに先だち、其徒に示し玉ふ汝ら我滅度せりと謂ふなかれ、我眞實法身は常住のネハン界に安住して長へに衆生を度す、衆生一心に我を見んと欲して懇念止まざる時は便ち我爲に身を現して說法すと。我ガヤに於て正覺を得たるは方便の身なり。眞實の法身は無量壽にして永恒に滅することなし。假使衆生の世界は時ありて滅すとも、淨き國は常に安穩にして天人常に充滿し園林諸〻の堂閣は種々の寶をもて莊嚴せり。而して如來は凡ての衆生をして此常樂の處に誘引せんが爲に身を分ちて世に出たるものなりと示し給へり。之を應身とす。

法身としては天地萬物を産出し保存するに天則秩序を以てし、報身としては終局目的に規律に隨て衆生を常住の平和なるネハン界に攝取し、應身は報身より身を分て世界に化現して教化を垂る。これを三身一體とす。三身衆生に對して三位ありと雖も本一體なり。之を三身一體說とす。

○

佛の三身とは、法身報身應身。法身とは天地萬物の本體、萬物は之によりて生存す

報身は常樂世界にありて衆生の心靈を開發し攝取の身。

應身は此世界に出でゝ人の身を以て人類を救ふ主である。報身は法身の粹なり、常樂世界に在して自在の德を以て慈悲心より應化身を世界に示現して人類を救濟す。西藏の佛典にアミダ如來は聖き國に在して人佛釋迦の本體なり。アミダ佛大悲三昧より人佛釋迦を化現して人類を救濟す云々。

八相應化とは、人界に化身を現じて人を度する狀態なり。生天、下天、托出胎、出家、降魔、成道、轉法輪、入涅槃。

生天。釋尊が人界に出るに先だちて天上のトシタの內院に在て天と人とを利生し救濟し玉ふ。

下天。天に在て時と處とを鑑み玉ひ、智仁兼備はる父母と文化の中國とを選みて、カビラ城のストダナ大王を父とし、マカマヤ夫人を母とし、四月八日に夫人沐浴清潔清夜夢に空中に白象に乘たる光明赫々として伎樂華香妙にして神を母胎に降し玉へり。

降生。ボサツ生るゝ時、ラビニ園に於て母后無憂樹の花を折んと欲して右手を擧ぐるに右脇より生じ玉ひ七歩を行きしと。立て自ら稱ふ、天上天下唯我獨尊と。

太子生れし日、五百の寶自ら現る等のよろづの善事あつまれるを以て御名をシタルタと名づく、譯すれば一切成就の義、また最も勝れて凡ての事業を遂るとの美稱なり。香山に阿私陀と云ふ仙人あり、神通を具ふれば來りて太子の三十二相を具ふを見

て自ら嘆き涙を流して曰く、太子の相好は必ず無上の道を成じて一切を救ふべき相、我齢すでに老ひて太子の教化に遇ふことを得ざるを悲しむと。

太子は幼にして學堂に在ては宗教論理美學倫理等を始めとし、禮樂射御書數より一切の道學に至るまで博く研學するに精進して成らざるなし。

輪王として四海を統御して萬乘に王たるべき御身にして天下の榮を一人に聚め得べき御身果報いみじき身なり。一時東門に遊觀するに老人の老衰せるを見、南門に病人の身痩せ體苦しむさまを見、死人の擧家哭泣するを見て卽ち謂へり、世間實に哀むべしと。世の非常を覺りて異日に道人の靜粛にして身も心も調熟せるを見て益々感發して世間の道の外に心靈修養の大道あることを知る益々切なり。

太子先に執杖釋氏の女ヤソタラといふ美貌怜悧世にすぐれたるあり之を娶らせたまひいと濃なる閨門の中に於て王子ラゴラといふをあげ玉ひしかども、無上道心切にして一家の人倫の道をもて世を誘ふも可なるべしと雖も印度の民族的宗教及び道德よりも、進んで人類的宗教及道德を以て一切の人類を一慈の下に攝化せんとの思召より、無上なる大道心を起して終に國と位とをすてて、年二十九歲の四月七日の夜、馭者車匿を具し健陟てふ馬に御して玉城を忍び出でたまふ。苦行林に入りて馬より下り身に飾る處の寶冠瓔珞を取て之を車匿に托して姥母及ヤソタラに遺物として珍妙の衣をぬぎすてゝ自ら鬘髮をそり除きて而して法服を着しぬ。次に山林に諸の道士につきて道を求む。アララ、ウドラタにつきて道を問ひしも、彼等が證する處未だ終局の眞理にあらずとて之を辭し去りて、ニレンゼン河の東岸なる伽闍仙苦行の林にすみて此處は樹林美しく岸高く水冷し、香樹種々の花にほひ草青々として綠の莚をつらねし如し此處に苦行を修し、正眞の道を求めんと、一日に一麻一米を食して身體痩疲す。

一日尼連禪河の金流に入て洗浴す。身體つかれて身出る能はず、樹枝に攀ぢて岸に上れり。

偶々牧牛の長の女難陀波羅が供養する處の乳靡によりて身體頓に平復本の如し。南

の方伽耶道場地に至り、ヒハラ樹の下に金剛座上に吉祥が施す處の柔輭草を敷いて、跏趺座して大誓願を發す。我今若し正眞の道を證せずば寧ろ此身を碎くべし。碎くとも此座を立たずと。

斯る大（　）心は天魔を驚かし、魔が眷屬を率ゐて逼るも時に大地震ひ轟き、（　）も劒の雨を降らし毒氣の風を飛し魔軍いかに力をつくすも大ばさつを動かす能はず。つひに智力を以て魔を降伏す。

菩薩十二月七日の夜魔を降伏し已つて禪定に入り、初夜に天眼通を得、中夜に宿命智を得、後夜に明星出る時に無上正覺を成じ無明の夢さめて正眞の靈の覺醒とはなりにけり。

世尊自己の正覺を成し已つて初めてこゝに於て華嚴三昧の中に、法身の菩薩等を度したまひ、次に鹿野苑にうつりて五比丘を度し、世尊始めて華嚴經を說玉ひし時より五十年間諸處をめぐりて敎化したまひしも最もマガダ國舍衞國に於て敎化し玉ふ。

阿彌陀佛に一體三身の事

法身

法身とは法性法身、一切諸佛の本體、世界萬物の根底なり。法身は形色なく一切の處に周徧して實在せざる處なし。無始無終にして變易なく、永恒の存在にして本質は絕對の精神にして、遍時間、遍空間、遍活動にして一切の萬物は之より生じ、之に攝せらる。學語には之を眞如法性等と云ひ、或は本覺の眞心と呼び、世間に之を本體といふ。

法とは軌持の義にして、一切の萬物悉く其範持のあるありて、また一切の諸佛もこの範によつて正覺を成す。一切の刹土身心悉くこの本質と性能とを離れて一物あるなし。此法身に不可思議の勢能あつて能く萬物を生じ一切を常恒に攝して保存す。

法身に體と量と具と。體とは本體にして絕對精神にして永恒不變の本質にして、一

切の衆物はこの本體を離れて有るものなし。物心二質の本底にして、其量は無限、空間に徧在して十方を盡し時間に徧在して無始無終、永恒にわたり一切の活動と能力とを德として具せざるなし、法として備はらざるなし。十界の依正これより生じ一切の法界萬物として之に保存せらる。一方には宗敎主體の世界萬物を變造して被造物卽ち所攝の萬類と現じ、一方には客體の淸淨法身として、萬類をして眞理に證入せしむる契機となりて、其規則規持によりて淸淨法身を顯はす。そを法身を名づく。

報身とは法身般若と解脫の德にして法身の萬德が悉く圓滿に顯彰したる身なり。體は法身と離れて別にあるに非ず。本質精神の屬性にして絕對理性と一切慧とが圓かに顯現したるすがたなり。其體は精神態が內外に映徹せる光明なり。智慧光なり。法身としては淸淨法身、衆生に對する法身は理性を與へ、個々を生じ、之を攝し、天然の世出世の統一せる本源にして、宗敎主體の元素たりと雖とも、法身のみにしては天然生活の中に有りて衆生の心を解脫靈化すること能はず。報身は法身の德を以て主體と客體との關係に、相待生滅界より脫却して靈化すべき軌持となり。この軌持とは卽ち衆生を世界依屬を脫却せしむる契機とし、絕對に入り解脫靈化の契機として、この契軌持を離れ（　）般若は卽ち一切慧にして衆生の精神に關係、信機開展して、

報とは自他受用。

（註――此の間に原紙の脫落あるが如し）

……精神生活し活動し終局に無限の光壽に歸入することを得る者は無上の靈福なり。最高等眞理の精神生活なり。此理をしらずして黑暗に冥より冥に入るものを迷と云ひ流轉といひ顚倒と云ふ。

今法身如來藏性の分子なれば必ずこの精神開展すれば信仰によつて開展すれば無量光壽顯現すべし。この性能を具しながら之を識らず、信せず、冥より冥に入るとはいかにあはれなるや。

法身とは軌持の義。この絕對精神卽ち神には天然規定のみに止らず、甚深の內面に

は法身如來藏、本質より產出せられたる一切を眞理の目的なる終局に歸入せしむべき軌持は淸淨本然に天然の精神の奥にあたへ、客觀界にも神の軌として具はり、法界に周徧すれども信仰なきものは之をしらず。個體の精神と彌陀の法身との關係すべき軌持なり。若しこの軌持にして有るなければ、衆生信仰の關係は徒勞のみ。この軌持とは衆生の精神を相待規定の內より絕對無限に、生滅より不生滅の眞理に、個體の迷を脫却して彌陀の眞理に歸入し、迷を轉じて覺となし、生死を涅槃とす、凡夫を覺するの規なり。

此法身は衆生の精神と彌陀の關係に於て、彌陀の觀念には自己離脫して、彌陀我に入り我彌陀に入る如く、主體と客體との關係に、主體を脫却して客體に契合せしめ、水月感應の妙機本然にして具有せり。彌陀の一切衆生を不斷に脫却し靈化せしむる軌持あり、この妙機あり。

般若とは彌陀の一切智法界に周遍して衆生の信機に關係に其機能を開展して衆生に慧眼を開かしめ、彌陀の一切智は彼に在りて主體は關係の外に活用するものにあらず般若は一切に周遍せり。光の如く信仰の關係には人の精神に關して智慧の眼となりて自己の無明を破してすべての罪惡を認め積極的には智慧の眼を開きて、佛智不思議智等は大圓鏡。

周遍せる般若は淸淨本淨にして、因緣に非ず自然に非ず。業に隨ひ緣に隨て發現す如來般若周遍するが故に、衆生が彌陀三昧の關係が衆生の精神に業に隨ひ、卽ち衆生三業の意業に發現して、衆生に佛知見を開示して佛の妙境を發現す。若し終局は彌陀の般若法界に實在せるに非んばいかでか是と關係の三昧中に佛知見開示すべき理あらんや。

實を剋して論ずれば彌陀の外に佛法なければなり。

無量光佛

一切無量の差別の境界を照すの智慧。無量差別其根底は如來法身の元理より出でゝ無量差別の現象界となり、報身の智慧光普く一切の無量の差別の品類を照して遺すことなきが故に無量光と名づけしにて、この差別の無量の法界は是如來の法身より出づこの差別の法界を顯はすの理を以ての分界(　)す。

現象差別の品類無量なりと雖十界十如一念三千の理を以て其品彙を示さば理瀧し易し。法身の理が無明によりて個々の心性と無量の個體となり、卽ち十の法界をなす。謂く六凡と四聖となり。六凡とは地獄餓鬼畜生修羅人天となり。四聖とは聲聞緣覺菩薩佛界なり。此十界の身體と心機の性質、國土も作用等が特殊なる、卽ち十法の相貌性質體格と能力作用とに於て各々殊なり。之の十種に異類を形成せし素因と資助との關係によつて習果と報果を異にす。之を十如と云。各特殊なり。而して十界の心理に他の九界に變化すべき性能と形式具はれり。十界に共に十界の形式を有すれば卽百界なり。百界十如の形式。

之を國土と肉體と心機との三世間に配すれば卽ち三千となる。此三千の形式は衆生精神作用が外界との關係によりて現れざるはなし。

是の如く三千の妙理は蠢々たる蠕動の類に至るまでも其理は悉く豫備せざるはなし所有る心あるものとして個々悉く此理を具しながら一定の形式規定ありと雖ども其形式品類無量なり。無量の國土の種類形勢衆生の形勢種類と個體の分品を分つ時は實に無量なり。此無量の個々の種類分界は本同一法身より顯出せざるはなし。無量の萬類は同一の法身より出でゝ、差別の個々の心性となり、この心理作用の理には十界具有すれども善と惡との誘導刺激によつて三善道三惡道の六道の現象界と顯はる。報身の無量光は普く法界三千乃至無量の法界萬類を照して遺すことなきも、此光明の中に在りて之に背きて自ら識らず。黑暗にあるものは六凡是なり。六道の無明の中に於て迷ながらも法身眞の理に順ずるものは三善道、違するものは三惡道なり。

心機開發して此光の中に於て惡素質解脫して消極的聖靈態の精神生活に入ものは聲

閉緣覺是なり。此光によつて惡質を解脫するのみならず靈聖德と靈福の積極的方面の靈化とし自己と共に萬類をして同じく靈化せんとして精神生活するものは菩薩と云ふ此菩薩の欲望たる一切の萬類と共に解脫靈化の已に圓滿に完全に到達せるものを應身の佛と名づく。六道は光明の中に在て之を識らず。二乘は此光明に就て解脫の一面を以て自ら盡せりと謂へり。菩薩と佛とは圓滿なる靈化の因と果なり。

彌陀の光明の德を圓滿に受るものは菩薩より佛果に到るの階級なり。此光明によりて解脫と靈化との進化の程度によつて菩薩の五位五十一地の階級を設たるものなり。菩薩の眞如を證すとは此光明を蒙りたるの謂に外ならず。

無量光とは法身の德として法身の本體より現出したる無量個々差別の境界と個體を圓かに照すを無量光と名づく。

此光りや無明の中なる人天には五常十善と淸淨なる禪定の光となりて顯はれ聲聞緣覺には(八大八智)偏眞空理解脫の光と現じ、菩薩には無量の總持無量の法忍無量の法門無量の禪定と顯はれ來る。

其形式に於ては三千の理を以て盡せり。所依の國土の種類性質衆生の個々の特殊の質身體と精神とに於て精密に之を(　)る時は衆生として個々獨特の身心と相性を有せり故に其分界種類形容悉く數量の盡すべきに非ず。無量光の智慧は一々之を照して知り玉はざるなし。

客觀觀念的證明

此宇宙の現象は我が寫象なり。眼を擧て大空を視るときは感覺界に無數の星宿ありて淸虛に碁列せり。眼を閉て冥想觀念するときは自己が觀念世界は尙之にすぎたり。實に觀念界の廣大なる、無邊際なる、遙かに天涯の星宿を觀ずれば觀念界に燦然たるは彼れ來るに非ず、我れ往くに非ず、已に往來の想絕て理交徹靈明にして自ら爾るなり。

この眞如の理卽ち彌陀の光りは無邊にして不識の精神態が法界に周徧せり。此無邊光の本質は、眞如の理は一切の處に實在して不可思議の眞理である。交徹靈通して空間に遍ねく時間に普く交徹して無邊である。偶に、若人眞空の理を識らんと欲せば內心の眞如還て外に徧く。情と非情と共に一體に處々皆遍して同眞法界と。この宇宙の現象界の感覺界にのみに心を注めて未だこの中に交徹せる絕對の精神あることは天然の精神では認めてゐない。

無邊光とは彌陀の智卽ち絕對不識的の精神態、徧空間徧時間。

この無邊光を認識せんと欲せば自ら觀念せよ。自己及びこの世界は彌陀無邊光の中なる不覺的一分なり。自己の精神も一部なり。いかにとなれば彌陀の無邊の外に精神及萬物一として理あるべきなければなり。無明に染められて自ら惑ひて自己の根底は卽是無邊の精神と一致(なるを知らず)。

然れば觀念せよ。此世界は我寫象なり。自ら目を擧て大虛を仰ぐとき無數の星宿と空間の無限なるは森然として顯はる。閉目冥想すれば自己の觀念界は十方を包括して邊際なきが如し。彼來るに非ず。我往にあらずして交徹靈通して能く觀るときは無邊の世界は觀念世界の中に包まざるなし。楞嚴經に、阿難が昔しはこの心は自己の胸中に在りと謂ひしも自己の精神の根底なる本性顯現してみれば十方微塵の世界現象界は山河大地も一切萬物も悉く自己が觀念界の一部たることを認識せりと。然れば知んぬ此無邊の空間も無數の世界も山河大地一切の萬物も悉く皆交徹靈明せる大精神無邊光の中の一部たることを。

人の精神には觀念的に彼と此と交徹靈通せる理あるのみならず、物質にも同じ理を具せり。一個の玉には無意識にして太陽の光りもすべての周圍の物體を映寫せり。玆に知る此は彼に映し彼は此に映して萬物同じく交徹して無邊光の形式を物質の中に現せり。玆に知る、此世界及び萬物は悉く無邊光の本質より現出したるもの(なるを)。

現象の一切世界及衆生等質現せる各一員にして之を統攝する總體は卽眞如無邊光永

恒自中存在なる非物質なる神なり。

心理的證明

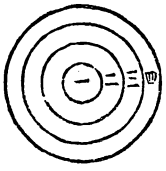
彌陀身心徧法界映現衆生心想中、又、是心作佛是心是佛諸佛正徧知海從心想生

心理的證明には彌陀を意識精神的人格の顯動なる根底となす。彌陀は自己の精神に含蓄せる故に心理的證明には彌陀を客觀界に求むべからず。自己の精神の根底即ち無邊の光彌陀なるを以て、一心の根底に向て彌陀の觀念に凝神し、世界的機制生理の心理的素質即ち翳膜除き去りて無邊の心光顯現するとき、始めて識る彌陀は是自己天眞の父なることを。

機制の生理的過程を以て精神生活の目的とする如きを迷と云ふ。

是心とはこの根底にして即ち彌陀の無邊態精神と一體なり。故に佛知見開示し機能致一の狀態は彌陀の外に自己有るなし。若し彌陀の外に自己あらば迷沒を免るゝ能はず。故に彌陀の中の自己なることを。この機制あらんかぎりは歸て彌陀の中の我なるをしらん。

彌陀の觀念



一は自己　小宇宙　個人精神

生理機制の素質あつて本質を覆ふ。是を根底とするは不識的無明の素質あつて絶對眞理を覆ふを以て根底とするは未だ眞理に非ず。

二　地球
三　現宇宙　大宇宙

四　絶對本體　宇宙本體　絶對精神

是絶對の根底なればこの自己を此絶對に投じて小我を抽象して絶對の大我を以て眞我とす。大我は絶對なるが故に無我なり。觀念こゝに至れば觀念理想の法身をみとめたるなり。

理性觀念的には常に凝神する時は一旦洞然として貫通することを得。理性は(顯性)することは難からず。內容は調ふること甚だ難とす。

彌陀の法身を極めて簡に(　　)自身は小宇宙にして個神意志は小精神なり。絶對の大精神を彌陀の法身と名づく。即ちこの絶對の精神は徧空間の不識精神態なるを無量光と名づけ、徧時間のゆゑに無量壽と名づく。

法身は絶對理性にして是形式なり。故に法身は觀念的に證せんと欲せば、自己の精神をこの主我を脱して天地を脱し、宇宙の本體と觀念的に致一する時は、(尤)も抽象にして純形式のみにして、すべての內容を抽象(ては)此絶對唯一の不識精神のみあり

法身の彌陀と致一せんに此精神上九重を徹し下金輪際を徹し(四方)に透明し十方に洞然として、我に非ず、彼に非ず、唯一の大精神のみを觀すべし。之を彌陀の法身を觀ずと名づく。

一枚洞然の形式のみにして少しも內容の動くべきなきにいたりて、內に非ず、外に非ず、中間に非ず。

一切知　光　形式	壽　寂　靜
一切慧　明　內容	命　活　動

理性は形式にして證明し易し。內容は佛敎の事識なる故に之を靈化することは甚だ難し。感情を平和にしすべての不靈福を脱して靈福としつねに歡喜と平和とに充され

内容に靈福と與へ歡喜平和ならしむるはこの客體より云はゞ應身の德にして念々信仰の心情に受動すべきもの(なり)此れが動機となりて情操を高尚にして且つ鞏固なる道德情操となり、意志の活動ならしむるものなり。

應身は感情には受動的にして靈福を感じ意志には活動的に實現するものなり。

一切知とは純粹理性、形式的にして感覺によらずして直觀なり。一時一念に十方一切の事として寫象せざるはなし。

一切慧とは內容が理性にかなふことにして如來の內容は理性なるが故に人の意志に關係して實現するときは眞理にかなふ意志として活動するのである。

法身は純粹理性なれば成も不成もなくすべての生理心質解脫すれば、觀念的に顯現すべし。理性のみならば惡素質脫却すれば顯示するが故に解脫のみにて充分なれども內容は解脫にあらずして靈化なり。故に內容を滿しめ、圓滿なる聖德は圓滿報身との關係によらざるべからず。

報身とは法身より開展したる圓滿の德の成就したる先覺者にして、已に圓滿なる果報より信仰の要素を衆生の信地に下すべき本質にして、すべて種子は先覺の果實より播布せらるゝものにして、種子卽ち要素は宗敎の成立には最必要なる元素にして、是を缺くる時は宗敎と關係あることなし。

たとへば彌陀の種子によらずして淨土の信仰立べきにあらず。彌陀の種子は信仰して終局には報身を成ずべきの素因なり。

之を信ずる者には必ずその結果なかるべからず。信仰の結果を終局目的に統一し總括するは報身といふ。卽彌陀の種子は彌陀の報身より出でゝ終には同じく彌陀の生命に入り統一せられて彌陀となりすべて圓滿に統一的の終局の統一を彌陀となづく。

果報の報身の種子

終局目的の統一なる如來をいふ。信仰の諸果報の圓滿なるの如來といふも同じ意なり。

法身の實體より一切の含識として出ざるものなし。然れども報身の種子によりて信仰成ず。

若し法身のみならば法身は實體にしてすべての宗敎の信不信にかゝはらずこの根底より出でざるはなし。法身は理性の根底なり。若し法身のみにして報身の關係によらずして衆生同一の結果を得べくば法身本能にして一切衆生悉く成佛せざるものなかるべし。

昭和六年三月二十五日印刷
同　三月二十八日發行

誌代年貳圓(郵稅共)

編輯兼發行人　山崎辨成

東京市小石川區小日向臺町三丁目
印刷人　春山治部左衞門

東京市小石川區水道端二ノ四四
發行所　ミオヤのひかり社
振替東京六六八五一番